ノーベル賞経済学は間違っていた

夏目漱石は、明治４４年、文部省からの学位授与を断っていますが、その理由を、夫人への手紙で、つぎのようにいっています。「博士なんていうものは、やってることはいくらか知ってるでもあろうが、そのほかのことはいっさい知りませんというはなはだ不名誉千万な肩書きだ」。百年前の近代化まっしぐらの日本において、その先頭に立つ専門知識人の限界を、漱石の慧眼は見抜いていたのです。

今日私たちは、歴代のノーベル賞経済学者たちが、実は世の中をよく知らなかったのだということに気づかされています。いまの世界経済の破綻は、これらノーベル賞受賞者たちが先導してきた現代経済学が招いたものであるからです。

経済理論には論争がつきものですが、現代経済学については、人は欲得だけの存在であるという前提は正しいのか、またそれぞれ特有の歴史、文化を持つ社会を市場原理へ一元化するというモデルは妥当かなどの疑問が、各国の経済学者から提示されてきておりました。そこには、「損して得とれ」というような観念はないようですし、助け合いの風習や世間の評価を重視する生活態度も考慮される余地はないのです。ついには当のノーベル賞受賞者の膝元からも、錯綜する原因を無視した単純モデルの机上理論、子供の砂場遊びだなどの批判がなされるに至っておりました。

けれども現代経済学は数学を駆使した精密、明晰な体系、つまり輝ける科学でした。そして半世紀もの間、経済界をリードし、諸学問との関係でも、政治学、社会学さらには法律学、哲学にまでその影響を及ぼしてきました。新自由主義はこれらが合流して結実したものと考えられます。しかし科学はあくまで人間にとっての手段にすぎないのであって、有徳でないものの退場は当然です。このたびの金融崩壊は有難い「論より証拠」となりました。

アメリカ大統領選、オバマ・バイデン組は、マニフェストの中に教育における芸術重視を掲げました。１９６０年代以降アメリカでは人文学が軽視され、結果ウォール街の論理増長を招いてきたと思いますが、それを反省する文芸復興の兆しであって欲しいです。

日本社会は、科学至上主義にも市場原理主義にも容易に染め上げられない人倫の風土があると思います。当センターは、昨年も企業の社会的貢献について、お互いに切磋琢磨する機会を継続的に設定して参りました。環境問題等についても、諸官庁から講師をお招きしての講演会などを重ねてきました。

今年も変わらぬ御指導のほど切にお願い申し上げます。

（2010.1.14　社団法人　くらしのリサーチセンター　賀詞交換会あいさつ）